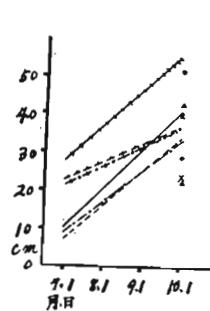
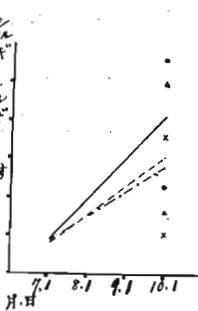


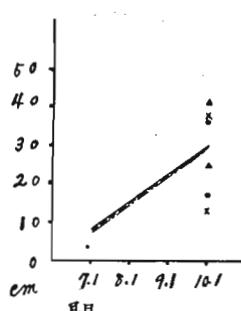
1図 居接(1)



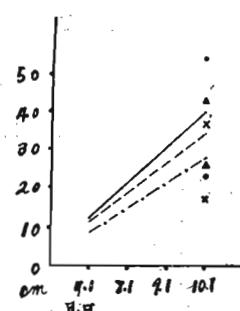
2図 居接(2)



3図 揚接(1)



4図 揚接(2)



第4表

種類	方法		挿木		接木	
	挿穗の長さ	一年間の伸長%	接穗の長さ	一年間の伸長%	接木の伸長とした比	
杉 (クモトオシ)	27.8	9.8	100	5.5~8	38.8	396
" (ウラセバル)	23.8	8.5	100	6.5~9	32.3	380
" (アヤスギ)	25.6	8.2	100	5~8.5	29.3	357
楠 (樹令38年)	28.2	1	100	5	12.4	1,240
センペル セニイア				5.4	56.9	

4. 考察

本試験で *Metasequoia* 種に杉の接木は活着及び生育も良好であったが、接木方法及び接木後の管理（特に芽かきを早くやりすぎないこと）如何によつては悪いものもあつた。又品種間でも活着及び生育に相異があることを明らかにした。この接木が今後如何なる生育を示すか、又それが杉の母樹の樹令、穂の状態等によりどの様に変化するかは未知数でこれが採穂母樹造成に活用出来るか否か今後の問題であり、之等の点について順次究明したいと思う。

7. 产地別にみた実生スギの生長経過について

都城営林署 鐘ヶ江留雄

1. まえおき

今回調査した林分は新植当時の記録によれば、母樹の产地に関する試験と同時に国有林産の優良種子配給区域の適否を決定することを目的として、全国的主要产地より林業試験場を通じて種子の配給を受け、熊本営林署大津苗畑にて養成した、2年生苗を产地別に植栽したものである。

植栽後は年々調査を実施して来た処であるが、戦争のため不定期となり、22年の調査を最後に本試験地は廃止となつたものを、その後の経過を知るため今回調査したような次第である。

2. 調査林分の概要

位置 宮崎県北諸県郡三股町瀬木 国有林13た林小班内

第1表 植栽本数の推移

区分	产地	植栽本数の推移							計
		秋田管内	前橋管内	東京管内	名古屋管内	大阪管内	高知管内	熊本管内	
植付本数		300	350	50	35	180	160	68	1,143
14年3月調査		212	291	31	37	131	84	52	828
16年3月調査		209	288	29	27	129	84	49	815
22年1月調査		209	273	7	27	128	84	49	777
31年10月調査		203	266	7	27	128	84	48	763
現存率		68	76	14	77	71	53	71	

(註) 東京管内的一部分は昭和20年9月の台風により崩壊流失。

植栽年度昭和12年3月、面積 0.51 ha、地況北向、傾斜20度、基岩、砂岩、広葉樹の伐採跡にして表土

深し、植栽関係、苗間列間共2m、補植、実行せず保有、下刈、6回、つる切2.

第2表 上長生長の比率

区分	产地	秋田管内	前橋管内	東京管内	名古屋管内	大阪管内	高知管内	熊本管内
調査時の平均樹高	14年3月	m 0.55	0.87	0.95	0.53	0.83	0.90	0.73
	16年3月	1.51	2.32	2.54	1.45	2.06	2.23	1.93
	18年3月	3.37	4.59	5.00	3.20	4.04	4.27	4.13
	22年1月	5.60	7.26	7.79	5.81	7.09	7.08	6.88
	31年10月	10.60	13.50	12.90	11.50	13.13	13.67	13.36
平均生長量		0.56	0.71	0.68	0.61	0.69	0.72	0.70

第3表 肥大生長の比較

区分	产地	秋田管内	前橋管内	東京管内	名古屋管内	大阪管内	高知管内	熊本管内
	18年3月調査	cm 4.9	7.0	7.4	4.2	6.4	7.0	5.9
	31年10月調査	14.4	17.7	19.1	15.7	17.6	20.5	19.4
平均生長量		0.8	0.9	1.0	0.8	0.9	1.1	1.0

第4表 気候帯に依る表日本と裏日本との生長比較

種子の产地	現在本数	昭和31年10月調査			すぎたまばえに対する被害程度	
		平均直径	平均樹高	平均葉積		
区分	署名	cm	m	m ³	%	
表日本式氣候帶	福島	67	15.6	15.4	0.15	22
	富岡	37	19.7	14.8	0.24	12
	大田原	14	21.4	13.7	0.28	23
	水戸	7	19.1	12.9	0.23	0
	高崎	25	17.6	13.4	0.21	18
	津山	8	15.7	12.5	0.14	38
	山崎	21	20.0	13.6	0.25	33
	龜山	33	20.9	14.2	0.28	12
	奈良	24	16.4	12.4	0.17	7
	広島	19	19.5	14.3	0.24	2
氣候帶	松山	5	18.4	13.2	0.20	28
	馬路	13	20.7	14.0	0.25	25
	魚梁瀬	13	21.7	14.2	0.29	34
	野根	23	20.2	13.6	0.26	13
	奈半利	11	17.5	13.0	0.21	65
	本山	11	26.5	15.0	0.43	22
	宇和島	8	18.2	12.7	0.21	34
	直方	36	18.8	12.6	0.22	29
	熊本	10	19.4	13.5	0.23	45
	大分	2	20.0	14.0	0.26	5
計		387	387.5	273.0	4.75	437
平均			19.4	13.7	0.24	22

裏日本式氣候地帯	白沢	28	14.3	10.3	0.11	66
	七座	33	13.8	10.4	0.10	82
	上小阿仁	42	13.2	10.2	0.09	83
	秋田	34	14.7	10.9	0.12	68
	大曲	37	14.1	10.3	0.10	79
	眞室川	29	16.4	11.5	0.16	79
	新發田	66	16.3	11.9	0.15	85
	喜多方	36	15.4	11.8	0.15	88
	高田	21	18.1	13.5	0.20	2
	富山	27	15.7	11.5	0.14	70
地帯	金沢	6	15.0	13.0	0.14	60
	鳥取	17	15.6	11.9	0.16	32
計		376	182.6	137.2	1.62	794
平均			15.2	11.4	0.14	66

(註) 表日本式と裏日本式氣候地帯の区分は福井英一郎著「日本の氣候」による。

3. 植栽後の経過

第1表で明かの如く何かの原因で苗木の活着が余りよくなかったことと、新植後補植が実行されなかつたことは林分構成上、多少の影響があつたかも知れないが、現在のうつ閉関係は余り不同のあるものとは認め難い。

種子の产地により、これを検討すれば第2表、第3表の通りで、产地別にみて例外的な生長を示すものもあるが、概略的に考察すると東北地方に進むにつれて

生長量が低下して行くことであり、第4表の如く気候地帯の区分により検討すると表日本式気候地帯が表日本式気候地帯に遙かに優つてゐることが明らかとなり、特に高知管内産のものが良好な成績であることが目立つてゐる。またスギタマバエの被害に対する程度からしても表日本産のものが良好である。

4. むすび

これ等の結果よりみて今後伐期までに晚生形の品種があつて生長量の増大するものがある場合も予想されるが、本試験の目的である產地別の生長の優劣と、これに伴う種子の配給範囲にも限界のあることが一応判明して來たといふことができると思う。

8. 九州における Podzolic soil について

熊本営林局 明石諫男・谷口吉信・阪本竜

1. Podzolic soil の概念

成帶土壤としての Podzolic soil については、古くから多くの研究が報告されている。この土壤は、いわゆる寒温帶地方のおもな土壤であつて、ソビエトにおける土壤学、とくに土壤型分類の草分けとなつた土壤とされている。

寒冷多湿な気候条件下では、腐植の分解が種々の面で阻害され、ために生じた腐植酸によつて、土壤上層部の塩基、ついで鉄化合物、礫土化合物が溶脱され、下方にそれらの化合物が集積する、いわゆるポドゾル化作用が行われる。

Podzolic soil には、落葉層 (A₁ 層)、溶脱層 (A 層)、集積層 (B 層) の三層が生成される。

従来 Podzolic soil は、わが国では中部、山陰以北および四国的一部に分布することが知られていたが、ここには九州地方の Podzolic soil の分布と、内大臣国有林における実例を報告するものである。

2 九州における Podzolic soil の分布と性質

最近まで、九州における Podzolic soil はきわめて稀で、わずかに宮崎県の西都営林署部内吹山国有林のコウヤマキ天然生林下にみられる程度であつた。この土壤は、中生紀層の砂岩粘板岩上にあつて、急斜面の岩石地である。

また農林省林業試験場の前田技官の調査では、屋久島の高所でも Podzolic soil がみられることが報告されている。

われわれは、昭和31年9月から12月にかけて、熊本県の矢部営林署部内の土壤調査を実施し、比較的広汎な Podzolic soil が内大臣国有林に分布することをみとめた。その概況は後述のとおりであるが、現在ま

でに九州でみられた Podzolic soil は以上の3ヶ所と考えられる。

これらの出現場所を検討してみると、九州地方における Podzolic soil の分布は、おおよそつぎのように考えることができる。

- a. 最も出現の可能性の大きいのは、九州中央山脈中、比較的森林植生の破壊されていない白髪岳から祖母山に至る主要稜線部で、海拔約 800m 以上の地域である。
- b. 比較的海拔高は低いが、コウヤマキ、モミツガの

第1図 九州における Podzolic Soil の分布

